

(情報名) ヤマブドウの雨除け栽培による病害発生抑制ならびに果実品質の向上

【要約】ヤマブドウを発芽期頃から収穫終了まで雨除け栽培することで、主要病害であるべと病、晩腐病の被害を大幅に軽減できる。これにより、十分成熟させて収穫ができ、糖度が高く、酸度が低く、果汁色の濃い高品質果実の安定生産が可能となる。

中山間農業技術研究所 試験研究部

【連絡先】0577-73-2029

【背景・ねらい】

飛騨地域の山中に多く自生するヤマブドウは、ワインやジュース等への加工で特産品化が期待できる品目で、当所ではその栽培化にむけて優良系統の選抜と安定生産を可能とする栽培体系について検討を進めているが、栽培を重ねることで年によりべと病、晩腐病等が多発し生産が不安定となっている。また、晩腐病による減収を回避するために十分成熟するまえに収穫せざるを得ず問題となっている。そこで、パイプハウスによる雨除け栽培が病害発生ならびに収量、品質に及ぼす影響を検討し、安定生産技術を確立する。

【成果の内容・特徴】

1. 発芽頃から収穫終了までの期間、間口2m、棟高2.2mの簡易なパイプハウスあるいは間口5.5m、棟高3.4mのパイプハウスで雨除けすると、露地に比べ開花期がやや早まる。また、健全な葉が遅くまで着葉し落葉期が遅くなる(表1)。
2. 上記の雨除け栽培により、主要病害であるべと病ならびに晩腐病の被害が大幅に軽減される(図1)。
3. 晩腐病の発病が抑えられることにより、健全果率が高まり安定生産が可能となる(表2)。
4. 晩腐病の発病が抑えられることにより、十分成熟するまで健全な状態で果房を維持でき、糖度が高く、酸度が低く、果汁色の濃い高品質果実の生産が可能となる(図2)。

【成果の活用面・留意点】

1. ビニール被覆は、遅くとも病害の感染時期の前となる開花期前までに行う。
2. ビニール除去時期は、晩腐病が着色期～成熟期にも感染しやすいため、収穫後が望ましい。
3. ハウスの規模は、仕立て法、ほ場の区画等に応じて決定するが、樹体と雨除けの間の空間が狭いと、夏季に高温となり、葉焼け、着色不良等の高温障害を受けることがあるので注意する。また、積雪地帯では施設の雪害にも注意する。
4. 害虫に対しては、発生状況に応じて薬剤防除を実施する。

【具体的データ】

表1 生育期 (2003)

区 z	発芽期	展葉期	開花期			落葉期	
			雌雄	始期	満開期		終期
露地-無防除	4/21	4/29	雌	5/27	5/29	6/2	10/31
			雄	5/25	5/28	6/2	
露地-防除	4/21	4/29	雌	5/27	5/29	6/2	11/10
			雄	5/25	5/28	6/2	
簡易ハウス-防除	4/21	4/29	雌	5/26	5/28	5/31	11/10
			雄	5/24	5/27	6/1	
ハウス-無防除	4/21	4/29	雌	5/26	5/28	5/31	11/15
			雄	5/24	5/27	6/1	

z 露地・防除区は殺菌剤2回、殺虫剤2回散布
簡易ハウス・防除区は殺虫剤のみ2回散布
無防除とは、石灰硫黄合剤以外無散布

表2 防除体系の違いと収量および品質 (2003)

区 z	総収量 (kg/樹)	健全果収量 (kg/樹)	その他 不良果 (kg)	糖度 Brix	酸度 (%)	果汁色 y 吸光度
露地-防除	6.0	0.3	0	16.8	1.60	0.18
簡易ハウス-防除	7.4	3.0	1.4	15.1	1.86	0.19
ハウス-無防除	7.3	5.1	0.1	16.8	1.71	0.17

z 表1に同じ

y 530nmの吸光度

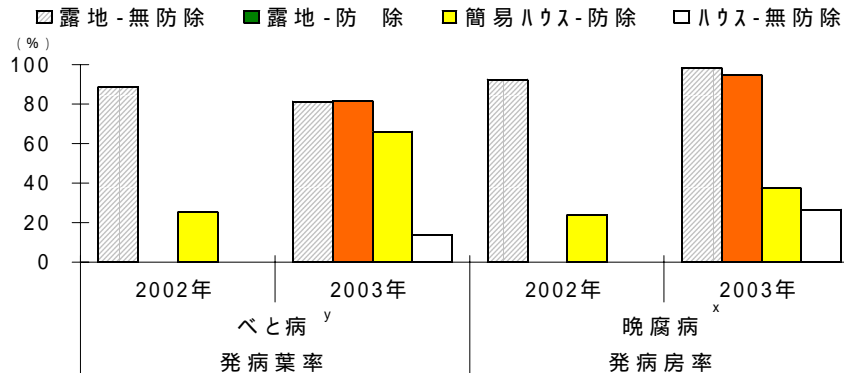


図1 ベと病・晩腐病の発病率

z 2002年は露地区、簡易雨除け区のみでいずれも殺菌剤無散布。
2003年は、防除区で殺菌剤を3回散布。それ以外の区は殺菌剤無散布。
雨除け被覆期間は、2002年:4/26-10/31、2003年:4/28~10/5(簡易ハウス)、10/27(ハウス)
被覆資材は厚さ0.075mmのPOフィルム
y 2002年は7/29、2003年は8/7調査
z 収穫時に調査(2002年は9/19、2003年は9/17)

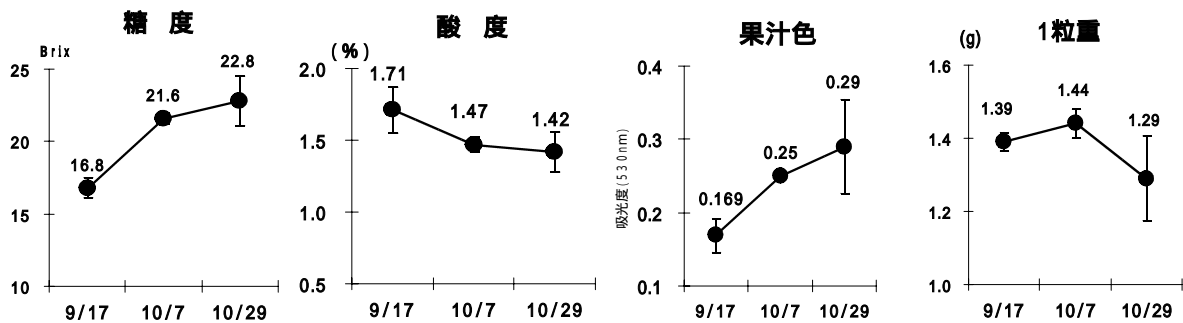


図2 収穫期と果実品質(2003)

注) 収穫終了まで間口5.5mのハイハウスで雨除けした。

研究担当者: 神尾真司、浅野雄二、宮本善秋